

曹洞 俳壇

選・村松五灰子

煤逃すすにげは団地の中のジャズ喫茶

千葉県 鈴木 英子

評 煤逃は歳末の煤払いの日に手伝いをしない家人。邪魔な存在として疎まれる前に逃げ出したのだろう。それが通い慣れた喫茶店。他の客にもそのような人が居るに違いない。

芝浜は何処あたりか大晦日

東京都 伊奈 三郎

評 拾った財布でどんちゃん騒ぎ。目が覚めたら女房が「ねぼけるんじゃないよ、そんな金がどこにある」。
「ご存じの落語の「芝浜」。年の瀬のお金の工面の連想が芝浜に繋いだ。

◆青い目の灌いでゐるや花御堂はなみどう 三重県 西村 廣視

◆門松を据えて木遣りを男衆 新潟県 星野 三興

◆着ぶくれて石炭焼べし少年期 埼玉県 鈴木 良二

◆元日は一族集ひ日本祭 ロサンゼルス 井上 健一

◆北陸の稀なる初日仰ぎけり 福井県 高島かず子

◆大だるま我にらみゐるとんど焼 福島県 大槻 弘

◆着ぶくれてささやかなこと嬉しがる 東京都 矢野 祥子

◆元旦や一服淹れて続き読む 宮城県 須藤智恵子

◆寒行の黙礼深く闇に去る 福島県 佐藤 宣夫

◆禅寺の暗き廊下に踏む余寒 神奈川県 小田喜信博

*選者吟

初蝶はつちょうの黄のころがつてころがつて

五灰子

*作句小見

初蝶来何色と問ふ黄と答ふ 虚子

初蝶は虚子の句にあるように黄色が印象的です。もちろん清潔感のある白い蝶が幾つも舞っている姿は良いのです。春は、あめつちの自然が喜び大騒ぎ。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

いまここに祖父の歩みし歴史をばかみしめ
て見ん屯田兵手帳 北海道 福浦 寛

評 屯田兵として北海道の開拓と警備に尽力した祖父の歩みをたどつてみようという作者の決意が伝わってくる。多くは士族の出身であったというから、慣れない極寒の地で家族を引き連れての移住生活の苦労は想像に余りある。

旗持ちて下校の子らの渡す人道路挟みて阿
形吽形 岐阜県 後藤 進

評 横断歩道を安全に子どもたちが渡るように誘導する人を、社寺を守る一对の仁王に見立て、その表情を阿形吽形としてとらえた面白さ。笑顔と真面目な顔のお二人だったか。

◆ マスクしてフード被れば怖いものないやうな氣して氣が
ゆるむなり 秋田県 小田 眞恭葉

◆ 数え日に子と指折りてかぞえつつ越後に雪の無きを詠る
新潟県 星野 三興

◆ 飲むほどに寂しくなりぬこの酒は鬼殺しとは聞いては
おるが 北海道 高橋 哲

◆ 見慣れたる山茶花の葉のつやめきも元日なればつくづく
愛し 兵庫県 前田あつ子

◆ 合流で変る川の名譜んじて数多の里も少し軽やか
青森県 中田 瑞穂

◆ 兎毘正しく掛かる獸跡わなを引き去る上手の獸
岩手県 関合 新一

◆ 雲紅く染めて峡の年は行くゆたけき老いをまた迎えむと
長野県 毛涯 潤

◆ 里芋の皮むき柿の渋抜きと秋の作業は母の手ほどき
秋田県 小松 紀子

◆ 賜たまの声三つまでを聞き分くも繁れる枝に紛れてゆけり
山口県 中井 清子

◆ 我儘を許してくる夫といま二人で歩む緩やかな坂
長野県 両角 徳子

*選者詠

七草のすずななかなか浮かびこずしろくつ
やよく粥吹き上がる ちづ

*作歌小見

「芹、薺なずな、御形ごがた、はこべら、仏の座、すずな、すずしろ、これぞ七草」と唱えながら、まな板の七草を包丁でたたいて、粥に散らすのがわが家のやり方。拙歌はど忘れの歌。暖冬と言われつつ冬は冬、皆さまを身体を大切にお過ごしください。



大本山永平寺



降誕

四月八日は、お釈迦さまのお誕生日です。

シヤカ族の王シュツドーナとマヤー王妃のあいだにお生まれになり、王子として大切に育てられました。柔軟で優しい子でしたが、生まれてすぐ母を亡くし、淋しさからの憂鬱と国をとりまく様々な困難により、成長するにしたがって、もの思いにふける少年となりました。そして、人の老い、病、死をみて自分の身にひきあてた時、人生を誰よりも深く考え思い悩んだのです。やがて結婚し、ラーフラという男の子を授かりましたが安らぎを得ることが出来ず、二十九歳の時、全てを捨て出家したのです。

六年間の修行を経て、ついに真理を明らかにされ「仏」と成られました。その時、「なんと不思議なことだろう。一切の生きとし生けるものは、皆仏の智慧と徳相が具わっている。ただ煩惱にとらわれて気づかずにいる」とお言葉を発せられました。

お釈迦さまは、欲望に魅せられない「生き方」をなされ、人間のまま仏として生きられたのです。

永平寺では、仏降誕法会を行い、「同證如来浄法身（お釈迦さまの生き方を学び行っていくます）」と甘茶を注ぎ、お誕生を祝います。

仏祖の往昔は吾等なり 吾等が当来は仏祖ならん

『正法眼蔵』「溪声山色」巻より

ご本山だより



大本山總持寺



報恩大授戒会ほうおんだいじゅかいえと鎌倉で特別展

總持寺では毎年四月十日から十六日まで「報恩大授戒会」が行われます。曹洞宗には多くの法要・儀式が今日まで伝わっておりますが、授戒会はその最も重要な一つであり、檀信徒（戒弟）と僧侶が一体となって七日間の修行を行います。

授戒とは、戒師さまよりお釈迦さまの根本の教え（戒）を受けただき、禅の心を得るといふことです。

總持寺では江川辰三えがわしんざん禅師さまが戒師となり、お釈迦さまに源を発する十六通りのお誓い（十六条戒）を戒弟に授けてくださいます。

授戒会は「一期一会いちごいちえ」の世界でもあります。これまで様々な人生を歩んできて、これからも別々の人生を送る多くの檀信徒の方々が一堂に集まり、共通の目標のもとに坐禅や礼拝・聞法などの修行生活に励むのです。生き方と戒が一つになること、これを「禅戒一如ぜんかいいちよ」といいます。

この素晴らしい報恩大授戒会に、お一人でも多くの檀信徒の皆さまが参加されることを望んでやみません。

また、四月二十三日（土）から五月二十九日（日）まで、鎌倉市の鎌倉国宝館（鶴岡八幡宮の境内）に於いて御両尊大遠忌の記念特別展「禅の心と私たち 總持寺の至宝」が開催されます。皆さまのご来館をお待ちしております。